

そのロボットは、うまくできていた。女のロボットだった。人工的なものだから、いくらでも美人につくれた。あらゆる美人の要素をとり入れたので、完全な美人ができあがった。もつとも、少しつんとしていた。だが、つんとしていることは、美人の条件なのだった。

ほかにロボットを作ろうなんて、だれも考えなかった。人間と同じに働くロボットを作るのは、むだな話だ。そんなものを作る費用があれば、もつと能率のいい機械ができたし、やとわれたがっている人間は、いくらもいたのだから。それは道楽で作られた。作ったのは、バーのマスターだった。バーのマスターというものは、家に帰れば酒など飲む気にならない。彼にとつては、酒なんかは商売道具で、自分で飲むものとは思えなかった。金は酔っぱらいたちがもうけさせてくれるし、時間もあるし、それでロボットを作ったのだ。まったくの趣味だった。

趣味だったからこそ、精巧な美人ができたのだ。本物そっくりの肌ざわりで、見わけがつかなかった。むしろ、見たところでは、そのへんの本物以上にちがいない。

しかし、頭はからっぽに近かった。彼もそこまで、手がまわらない。簡単なうけ答えができるだけだし、動作のほうも、酒を飲むことだけだった。

彼は、それが出来あがると、バーにおいた。そのバーにはテーブルの席もあつたけれど、ロボットはカウンターのなかにおかれた。ぼろを出しては困るからだだった。

お客は新しい女の子が入つたので、いちおう声をかけた。名前と年齢を聞かれた時だけはちゃんと答えたが、あととはだめだった。それでも、ロボットと気がつくものはいなかった。

「名前は」

「ポッコちゃん」

「としは」

「まだ若いのよ」

「いくつなんだい」

「まだ若いのよ」

「だからさ……」

「まだ若いのよ」

この店のお客は上品なのがが多いので、だれも、これ以上は聞かなかつた。

「きれいな服だね」

「きれいな服でしょ」

「なにが好きなんだい」

「なにが好きかしら」

「ジンフィーズ飲みたい」

「ジンフィーズ飲むわ」

酒はいくらでも飲んだ。そのうえ、酔わなかつた。

美人で若くて、つんとしていて、答えがそつけない。お客は聞き伝えてこの店に集つた。ポッコちゃんを相手に話し、酒を飲み、ポッコちゃんにも飲ませた。

「お客のなかで、だれが好きだい」

「だれが好きかしら」
 「ほくを好きかい」
 「あなたが好きだわ」
 「こんど映画へでも行こう」
 「映画へでも行きましょうか」
 「いつにしよう」
 答えられない時には信号が伝わって、マスターがとんでくる。
 「お客さん、あんまりからかっちゃあ、いけませんよ」
 と言えば、**たいていつじつまがあつて、お客はにが笑いして話をやめる。**
 マスターは時どきしやがんで、足の方のプラスチック管から酒を回収し、**お客に飲ませた。**
 だが、お客は気がつかなかった。若いのにしつかりした子だ。べたべたおせじを言わないし、飲んでも乱れない。そんなわけで、**ますます人気が出て、立ち寄る者がふえていった。**
 そのなかに、ひとりの青年がいた。ポッコちゃんに熱をあげ、通いつめていたが、いつも、もう少しという感じで、恋心はかえって高まっていった。そのため、勘定がたまって支払いに困り、とうとう家の金を持ち出そうとして、父親にこっぴどく怒られてしまったのだ。
 「もう二度と行くな。この金で払ってこい。だが、これで終りだぞ」
 彼は、その支払いにバーに來た。今晚で終りと思つて、自分でも飲んだし、お別れのしるしといつて、ポッコちゃんにもたくさん飲ませた。
 「もう來られないんだ」

「もう來られないの」
 「悲しいかい」
 「悲しいわ」
 「本当はそうじゃないんだろう」
 「本当はそうじゃないの」
 「きみぐらい冷たい人はいないね」
 「あたしぐらい冷たい人はいないの」
 「殺してやろうか」
 「殺してちょうだい」
 彼はポケットから薬の包みを出して、グラスに入れ、ポッコちゃんの前に押しやった。
 「飲むかい」
 「飲むわ」
 彼の見つめている前で、ポッコちゃんは飲んだ。
 彼は「勝手に死んだらいいさ」と言い、「勝手に死ぬわ」の声を背に、マスターに金を渡して、そとに出た。夜はふけていた。
 マスターは青年がドアから出ると、残つたお客に声をかけた。
 「これから、わたしがおりますから、みなさん大いに飲んで下さい」
おごりますといつても、プラスチックの管から出した酒を飲ませるお客が、もう来そうもないからだつた。
 「わーい」

「いいぞ、いいぞ」

お客も店の子も、乾杯しあつた。マスターもカウンターのなかで、グラスをちよつと上げてほした。

その夜、バーはおそくまで灯がついていた。ラジオは音楽を流しつづけていた。しかし、だれひとり帰りもしないのに、人声だけは絶えていた。

そのうち、ラジオも「おやすみなさい」と言つて、音を出すのをやめた。ポッコちゃんは「おやすみなさい」とつぶやいて、つぎはだれが話しかけてくるかしらと、つんとした顔で待っていた。

ある別荘地の朝。林のなかの小道を、エヌ氏はひとりで散歩していた。彼は大きな会社の経営者だが、週末はいつもこの地でくつろぐことにしているのだ。すがすがしい空気、静かななかでの小鳥たちの声……。

その時、木かげから若い女が現われた。明るい服装に明るい化粧。そして、にこやかに声をかけてきた。

「こんにちは」

エヌ氏は足をとめ、とまどって聞いた。

「どなたでしたかな。失礼ですが、思い出せません」

「むりもありませんわ。はじめてお会いするのですから。じつは、ちょっとお願いが……」

「しかし、あなたは、どなたなのですか」

「それを申しあげると、お驚きになるでしょうけど……」

「いや、めつたなことでは、驚きませんよ」

「殺し屋ですよ」

女は簡潔に答えた。しかし、見たところ、虫も殺せそうにない。エヌ氏は笑いながら、

「まさか……」

「冗談でしたら、なにもわざわざ、こんな場所でお待ちしませんわ」

女は、まじめな口調と表情だった。それに気がつく、エヌ氏は不意にさむけのようなものを感じ、青ざめながら口走った。

「さては、あいつのしわざだな。だが、こんな卑劣な手段に訴えるとは、思わなかった。ま、まっしてくれ。たのむ。殺さないでくれ」

哀願をくりかえすと、女はこう言った。

「誤解なさらないで、いただきたいわ。殺しに来たのでは、ごさいませんのよ」

「はて、どういふことだ。殺し屋がわたしを待ち伏せていた。しかし、殺すのが目的ではないと言う。殺し屋なら、殺すのが商売のはずだ」

「そう早合点なさは、困りますわ。注文をいただきにうかがう場合だって、ありますのよ。いまはそれですよ。どうかしら、ご用命いただけないかしら」

事態がいくらかのみこめて、エヌ氏はほっとした。

「そうだったのか。すっかり驚いてしまった。しかし、いまのところ、用はない」

「おかくしになることは、ありませんわ。さつき、さてはあいつか、とおっしゃいました。あいつとは、G産業の社長のことでございましょう」

「ああ、G産業にとつて、わが社は最大の商売がたきだ。競争に勝つには、非常手段をとりたくもなるだろう、と考えたわけだ。ということは、わが社にとつても、G産業は最大の商売がたき。ここでの話だが、正直なところ、わたしとしても、彼が死んでくれればいい、と思わないでもない」

女は目を輝かせて、身を乗り出した。

「そのお仕事を、やってあげましょうか」

「それは耳よりな話だが……」

「お引き受けしたからには、手ぬかりひとつなく、完全にやりとげてごらんに入れますわ」

エヌ氏は、女を眺めなおした。だが、そんな仕事やれそうには見えない。また、冷酷な分子を配下にそろえていそうにも見えない。彼はしばらく考えてから言った。

「せっかくだが、お断わりしよう。あなたを全面的に信用しようにも、それだけの根拠がないではないか。万一、やりそこなってつかまり、わたしが依頼したということが表ざたになったら、わたしまでが破滅だ。そんな危険をおかしてまで、彼を殺す気はない」

「ごもつともですわ。だけど、小説やテレビだけの知識で、殺し屋を想像なさらないように。銃や毒薬を使ったり、自動車事故をよそおうといった、ありふれた発覚しやすい方法を使うのでは、ありませんもの」

「という、どんな殺し方をするのだ」

「決して不審をいだかれない死、病死をさせるのですから」

エヌ氏は顔をしかめ、にが笑いをした。

「冗談じゃない。そんな方法など、ありえない。第一、どうやって病気にさせるのだ」

「呪い殺す、とでもしておきましょうか」

「ますますひどい。失礼だが、正気なのですか。病院でみてもらいたらいかがです」

からかうようなエヌ氏の視線を感じないかのように、女は話を進めた。

「呪い殺すという言葉が古いのでしたら、こう言いかえてもけっこうですわ。巧妙な手段で、相手の周囲のストレスを高め、心臓を衰弱させて死に至らしめる。現代の医学の定説によりますと、ストレスとは……」

「こんどは、急にむずかしい話になった。要するに、彼を自然死させるといふのだな。しかし、まだどうも信用しかねる。そううまくいくとは……」

エヌ氏は腕を組み、首をかしげた。女はその内心を察してか、

「うまい話を持ちかけ、お金だけ受取って、そのまま。こんな点を、ご心配なんでしょうね。だけど、ご安心いただきたいわ。すんでからの成功報酬で、けっこうですの。手付金など、いりませんわ」

「しかし……」

「期限もお約束いたしますわ。三カ月以内と申しあげたいところなんですけど、余裕をとって六カ月待っていたら、確実にやりとげてさしあげます」

「いやに自信があるのだな。しかし、こんな時にはどうするのです。成功はした、それなのに、わたしが報酬を払わない。困るでしょう」

「きつと、お支払い下さいますわ。あたしの手腕を、ごらんになれば」

「そういうものかな。それなら、まあ、やってみてくれ。成功すれば、お礼は払う。成功しなくても、もともとだと。たとえ、やりそこなって発覚しても、わたしが巻きぞえになるような証拠も、残らないようだ」

エヌ氏は慎重に考えながら、ついにうなずいた。

「では、楽しみにお待ちになって下さい」

女は急ぎ足で帰っていった。それを見送りながら、エヌ氏は半信半疑でつぶやいた。

「妙な人間もいるものだな。本当にそんなことが出来るのだろうか。手付金なしだから、べつに損もしなかったが」

しかし、そんなことも忘れ、四カ月ばかりたった時、エヌ氏は、ニユースに接した。問題のG産業の社長が、病院での手当てのいかにもなく、心臓疾患で死んだのだ。そして、警察が不審を持って調べはじめたという動きもなく、無事に葬儀も終わった。

その数日後、エヌ氏が別荘での朝の散歩をしていると、林の道でまた、いつかの女が待っていた。こんどは、エヌ氏のほうが、先に声をかけた。

「こんなにすばらしい手腕とは、思わなかった。おかげで、わが社もG産業を圧倒できそうだ。しかし、まだ信じられないほどだ」

「お約束した通りでしょう。では、報酬をお願いしますわ」

もし払いたくないと断わったら、こつちが対象にされるかもしれない。

「わかっている。払うよ」

「ありがとうございます」

女は金を受取り、エヌ氏と別れた。そして町へ。彼女は、あとをつけられないようにとだけ注意した。素性がわかつては、困るのだ。

家へ帰り、服装も髪型も化粧も、ずっと地味なものに変える。それから出勤し、仕事のための白衣に着かえれば、立派な看護婦だ。事実、医師たちの信用も厚い。だから、彼女のたいいていの質問に、医師は答えてくれる。

「先生、いま帰られたかたですけど、病状はどうなんですか」

「良くない。正直なところ五カ月かな。長くても八カ月はもたないだろう。しかし、こんなことは、決して本人や家族の者に言うなよ。ショックを与えることになる」

「もちろん、わかっておりますわ……」

彼女だって、本人や家族に告げるつもりはない。もつとも、カルテで住所を調べ、職業を調べ、その人にうらみを持っている人や、商売がたきには……

「これがわたしの作った、最も優秀なロボットです。なんでもできます。人間にとつて、これ以上のロボットはないといえるでしょう」と博士は、とくいげに説明した。それを聞いて、お金持ちのエヌ氏は言った。

「ぜひ、わたしに売ってくれ。じつは離れ島にある別荘で、しばらくのあいだ、ひとり静かにすごすつもりだ。そこで使いたい」

「お売りしましょう。役に立ちますよ」

と、うなずく博士に大金を払い、エヌ氏はロボットを手に入れることができた。

そして、島の別荘へと出かけた。迎える船は、一カ月後でないかとやってこない。

「これで、ゆつくり休みが楽しめる。手紙や書類は見なくてすむし、電話もかかってこない。まず、ビールでも飲むとするか」

こうつぶやくと、ロボットはすぐにビールを持ってきて、グラスについでくれた。

「なるほど、よくできている。ところで、おなかもすいてきたぞ」

「はい。かしこまりました」

と答え、ロボットはたちまちのうちに食事を作つて、運んできた。それを口を入れたエヌ氏は、満足した声で言った。

「これはうまい。さすがは、優秀なロボットというだけのことはある」

料理ばかりか、あとかたづけも、へやのそうじも、ピアノの調律さえやってくれた。また、面白い話を、つきつきにしゃべってくれる。まったく、申しぶんのない召使いだつた。かくして、エヌ氏にとつて、すばらしい毎日ははじまりかけた。

しかし二日ほどすると、ようすが少しおかしくなってきた。ふいに、ロボットが動かなくなったのだ。大声で命令しても、頭をたたいてもだめだつた。わけを聞いても答ええない。

「やれやれ、故障したらしいぞ」

エヌ氏はやむをえず、自分で食事を作らなければならなかつた。だが、しばらくたつと、ロボットは、またもどのように、おとなしく

働きはじめた。

「時には休ませないと、いけないのかな」

それでもなさそうだつた。つぎの日、ロボットはガラスふきの仕事の途中で、逃げだしたのだ。エヌ氏はあわてて追いかけたが、なかなかつまえられない。いろいろと考えたあげく、苦心して落し穴を掘り、それでやつと連れもどすことができた。命令してみると、このさわざを忘れたように、よく働きます。

「わけがわからん」

エヌ氏は首をかしげたが、ここは離れ島、博士に問いあわせることもできない。ロボットは毎日、なにかしら事件をおこす。突然あほれだしたこともあつた。腕を振りまわして、追いかけてくる。こんどは、エヌ氏が逃げなければならぬ。汗をかきながら走りつづけ、木にのぼつてかくれることで、なんとか助かつた。そのうちに、ロボットはおさまるのだ。

「鬼ごっこのもりなのだろうか。いや、どこかが狂っているにちがいない。とんでもないロボットを、買わされてしまった」

こんなぐあいだ、一カ月がたつた。迎えにきた船に乗つて都会に帰つたエヌ氏は、まさきき博士をたずね、文句を言った。

「ひどい目にあつたぞ。あのロボットは毎日のように、故障したり狂つたりした」

しかし、博士は落ちついて答えた。

「それでいいのです」

「なにがいいものか。さあ、払った代金を返してくれ」

「まあ、説明をお聞き下さい。もちろん、故障もおこさず狂いもしないロボットも作れます。だけど、それとつしよに一カ月も暮すと、運動不足でふとりすぎたり、頭がすつかりぼけたりします。それでは困るでしょう。ですから、人間にとつては、このほうがはるかにいいのです」

「そういうものかな」

とエヌ氏は、わかつたような、また不満そうな顔でつぶやいた。

エフ博士は宇宙船に乗って、星から星へと旅をつづけていた。ただ見物してまわっているのではなかった。文明のおくれている住民のすむ星を見つけると、そこに着陸し、さまざまな分野の指導をするのが目的なのだ。

ちよつと考えると大変な仕事だが、どの星でも、いちおうの成果をあげてきた。それは、博士が自分で完成したよく働くロボットをひとり、いつしよに連れていたからだ。大型で、見たところは、あまりスマートとはいえない。しかし、力は強く、なんでもできた。また、たいいていのことは知っていたし、言葉もしゃべれる。

「さて、こんどはあの星におりよう。望遠鏡でながめると、ここの住民は、わたしたちの手伝いを必要としていそうぞ」

と、博士は窓のそとを指さした。操縦席のロボットは、いつものように忠実に答えた。

「はい。ご命令どおりにいたします」

宇宙船は、その星へと着陸した。住民たちの生活は、ずいぶん原始的だった。毛皮をまとい、ほら穴に住み、ちよつど大昔の地球のようだったのだ。

ここでもまた、住民たちと仲よくなるまでが、ひと苦労だった。最初のうちは、石をぶつけられたりした。しかし、ロボットは平気だったし、そのうしろにかくれば、博士も安全だった。やがて、こちらに敵意のないことが相手に通じ、住民たちの言葉がいくらかわかりはじめると、仕事は急速にはかどっていった。

博士はロボットに命令し、地面をたがやして種をまき、畑の見本を作らせた。また、川のふちに水車を作らせ、その利用法を示した。どれもロボットにとっては簡単な作業だったが、住民たちは目を丸くして驚き、大よろこびだった。

さらに、動物をつかまえるワナの作り方、家の建て方、食糧の貯蔵法、病気の防ぎ方などを教えさせた。ロボットの頭のなかには各種の知識がつまこまれてあるので、なんでも教えることができるのだ。

エフ博士の役目は、つぎにはどんな命令を出したらいいのか考えることだった。あとは時どきロボットに油をさし、エネルギーを補給

し、外側をみがいてやるぐらいでいい。

こうして、しばらくの時がたった。ロボットが休みなく働いてくれたおかげで、住民たちの生活はずつとよくなった。住民たちは争うこともしなくなり、勉強することを知り、学んだ知識をべつな者に伝えるようになった。このようすを見て、博士は言った。

「さて、文明も順調に発展しはじめたようだ。これからは、自分たちで力をあわせてやるだろう。そろそろここを出発し、べつな星をめざすでしょうか」

「はい。そういたしましょう」

ロボットは答え、その準備にとりかかった。

その出発の日。聞き伝えて集った住民たちは、口ぐちにお礼の言葉をのべた。

「おかげさまで、わたしたちは以前にくらべ、見ちがえるように向上しました。ご恩は忘れません。この感謝の気持ちをいつまでも忘れないようにと、記念の像を作りました。お帰りになる前に、ぜひごらんになって下さい」

博士はうれしそうだった。

「そんなにまで感謝していただけるとは。ここの仕事も、やりがいがあったといえます。よろこんで拝見いたしましょう」

住民たちに案内され、博士とロボットはついていった。そして、丘の上にたてられている大きな石の像を見た。心をこめて作られたもので、花で美しく飾られている。しかし、それはエフ博士の像ではなく、ロボットの像だった。住民たちが尊敬したのは、ロボットのほうだったのだ。

任務の重大さを感じながら、エヌ氏はある国の首都に到着した。スパイとしてだ。子供のころからあこがれていたこの職業に、やっとつくことができたのだ。そして、これが初仕事。決意は炎のごとく燃え、勇気はからだにみちあふれ、緊張した神経はびりびりしている。しかし、彼は肩をいからせ、武者ぶるいしながら乗り込んだのではない。そんな態度をとったら、すぐに怪しまれてしまう。

地味な服装と、ひかえ目な動作。なるべく平凡な外見を、よそおわねばならぬ。表むきは、古代美術研究家ということになっている。他人には温和な印象を与える肩書のはずだ。

その国についてエヌ氏は、家具つきアパートの一室をかり、そこに落ち着くことにした。だが、部屋にはいったからといって、安心はできない。どこかに、盗聴マイクがしかけてあるかもしれない。また、超小型テレビカメラの監視装置が、かくされてないとも限らない。

エヌ氏は部屋のなかを、徹底的に調べはじめた。テーブルやベッドや椅子などの脚をとりはずし、ラジオを分解し、電話機の裏をあけ、花びんの花を抜いてなかをあらためた。

さらに、通風装置や洗面所の設備をこわし、ジュウタンをめくり、クッションや枕のなかを調べ、鏡のむこう側からのぞかれていないかたしかめ、くまなく検査した。

しかし、まだ完全とはいえない。壁や天井や床をこつこつとたたいて反響に耳を傾け、なにか装置が埋めこまれていないかと、しらみつぶしにさぐっていった。

そのうち、ドアにノックの音がし、来客のけはい。エヌ氏は身がまえて言った。

「どなたですか」

「このアパートの管理人です」

中年の婦人の声で、聞きおぼえはある。

「どんなご用でしょう」

「壁や床をたたかれてうるさいと、ほかの部屋の人から文句が出ました。いったい、なにをなさっているのです。あけて下さい。管理人として、なかをたしかめ、みなさんに説明する責任がありますから」

入室を断わると、かえって怪しまれ、さわぎが大きくなるばかりだろう。やむをえず、エヌ氏はかぎをはずした。管理人の女は室内を見て、目を丸くした。あばれん坊の子供だって、こんな無茶なちらかし方はしない。

「なんです、これは。泥棒にでもはいられたのですか」

「いえ、その……」

エヌ氏は説明に困って、どぎまぎした。

「冗談半分でしたら、許せません。二度とこんなことをなさったら、出ていってもらいます。こわした品は、あなたの負担で、もと通りにしてもらいますよ」

エヌ氏はすっかり恐縮した。彼は食堂を出て注意ぶかく歩き、あるバーにはいった。酒を飲んでいると、となりの男が話しかけてきた。

「お仕事はなんですか」

「古代美術の研究ですよ……」

エヌ氏は表むきの職業を答えながら、タバコを口にした。相手はライターをつけ、さし出した。そのとたん、エヌ氏はライターをたたき落した。毒ガスが出てくるかもしれないではないか。

「なんです失礼な」

怒るのは、当り前だ。あわや乱闘がはじまりそうになった。

しかし、ちょうどその時、若い女がバーにはいつてきた。彼女はエヌ氏と同じ組織に属するスパイ、すなわち同僚だ。ここで待ちあわせることに、なっていたのだ。彼女があやまってくれたおかげで、さわぎはそれ以上ひろがらず、なんとかおさまった。

エヌ氏は彼女と夜の道を歩きながら、仕事の打ち合わせをし、彼女のアパートまで送っていった。彼女はすすめた。

「ちよつとはいって、紅茶でもお飲みにならない」

「ありがとう」

彼女は紅茶を入れてくれた。エヌ氏は考えた。彼女はたしかに同僚だ。しかし、敵に買収された二重スパイでないと、断言できるだろうか。警戒するに越したことはない。スパイは、非情な職業なのだ。

そこで、すきをみて紅茶のカップをすりかえた。飲むとすぐに眠くなってきた。

朝になって起きると、彼女が言った。

「どうして、あたしの紅茶を飲んじゃったの。あたし不眠症なので、寝る前に紅茶に薬を入れて飲むことにしてるのよ。おかげで……」

やがてエヌ氏は、上司から帰国を命じられた。アパートの管理人の女は、変な古美術研究家だと言いつらすし、公園の少年たちはボールをぶつけて面白がる。レストランやバーでは敬遠される。部屋を訪れたセールスマンを、敵のスパイと勘ちがいでなぐったこともあった。これでは、目立ってしまうが、ないのだ。

帰国したエヌ氏は、今後ずっと事務的な仕事だけをやらされることになった。

エヌ氏の後任のスパイとしては、のんきな性格の男が選ばれた。しかし、その男は大きな盗聴機がしかけられているのに気がつかず、すぐ身分がばれた。そして、見知らぬ人からもらったお菓子をいい気になつて食べ、たちまち毒殺されてしまった。

薬のききめ

お金持ちのアール氏のところへ、ひとりの男がたずねてきた。

「どなたです。そして、ご用件はなんですか」

とアール氏が聞くと、男は答えた。

「わたしは発明家です。じつは研究を重ねたあげく、すばらしい薬を、やっと完成しました。あなたに応援していただいて、どんどん作って売れば、おたがいにも大もうけができると思います。いかがなものでしょう」

「ああ、有利な事業なら、資金を出してもいい。しかし、いったい、どんな薬なのだ」

男は錠剤の入ったビンを取り出し、そばの机の上に置きながら言った。

「忘れてしまったことを、思い出す薬です」

「なるほど、おもしろい作用だな。それで、使い方はどうなのだ」

「簡単です。飲めばいいのです。この一錠を飲めば、きのうのことを、すっかり思い出します。また、二錠ならおとこのこと、三錠なら三日前のこと、といったぐあいです」

アール氏はビンをながめ、質問した。

「いろいろな大きさの錠剤があるようだが、それはなぜだ」

「成分は同じですが、量が多くなっています。中型のは一錠でひと月前のことを、大型のは、一錠を飲めば一年前のことを思い出しますので。だから、うまく組合わせて飲めば、過ぎさつたどの日のことでも、思い出せるわけです」

「しかし、どんな役に立つのだろう」

「あらゆる方面で、役に立ちます。忘れっぽくなった老人でも、**これがあれば若い人に負けずに働けます**。また、メモや日記をつけるひまもないほどいそがしい人も、安心して仕事に熱中できることでしょ

う」

「世の中のためにもなりそうだな。だけど、これに害はないだろうな」

「もちろん、その点は大丈夫です。わたしも使ってみましたし、動物を使った実験も、何度もやってみましたが」

男は書類を出してくわしく説明しようとしたが、アール氏は手を振った。

「たしかに無害なら、それでいい。となると、問題は、はたして効果があるかどうかだ。いま、自分で飲んで、**ためしてみることにする**。」

それで確実とわかれば、資金を出すことにしよう」

「何錠ぐらい、お飲みになりますか」

「たくさんくれ。十歳ぐらいだったころのことを、思い出してみたいのだ。そんな昔のことでも、効果はあるのだろうか」

「まだ、わたしはやってみませんが、あるはずですよ。それよりも以前の、うまれたてのところとか、うまれる前となるとむりですが」

「では、やってみることにしよう」

アール氏は錠剤の数をかぞえ、コップの水で、つきつきに飲みこんだ。そして、目をとじてイスにかけていたが、やがて目を開いた。

待ちかまえていた男は、身を乗り出して聞いた。

「いかがでしたか」

「うむ。すばらしいききめだ。子供のころのことを、ありありと思い出せた。とてもなつかしい気分を、味わえた」

「それは、けっこうでした。では、資金を出していただけるわけですね」

「いや。そのつもりだったが、気が変わった」

アール氏は首を振り、男はふしぎそうに文句を言った。

「それでは、お約束とちがうではありませんか。なぜです」

「知りましたれば、**いまと同じ量の薬を飲んでみたらいい。すっかり忘れていたが、子供のころ、近所にいじわるな子が住んでいて、わたしはよくいじめられた。こんなやつとは、二度とつきあうまいと決心したものだ。そいつとは……**」

こう言いながら、アール氏は前にいる男の顔を指さしたのだ。